7月16日～17日 全国若手市議会議員の会 in 福島 視察報告

時計の針を再び動かすために・・・

7月に全若の役員会と東北ブロック・災害対策研究部会合同の研修会が福島県で開催されました。研修会の内容は福島市での座学、そして東日本大震災の原発事故被災地である富岡町の現地視察でした。私自身、原発事故被災地を訪れるのは初めてであり、いわゆる「フクシマの現実」を目の当たりにし、大きな衝撃を受けました。全国各地から50名を超える若手市議が集った研修会のご報告です。

研修会初日、福島市のコラッセふくしまからバスで富岡町へ向かう。あいにくの大雨だ。市街地を抜け、郊外に入り、バスは浜通りへと進む。車内で昼食の弁当を食べ終え、ふと窓の外に目をやると田園地帯が広がり、その奥には緑濃き美しい山々。それは横手と変わらない日本の風景である。しかし、しばらくすると道路沿いのあちこちに並べられた黒く、大きな袋が出現した。除染によって出た草などの廃棄物を詰めたものである。「いよいよ近づいてきた…」との思いを強くする。

富岡町に入った。福島第一原発から20㎞圏内だ。至るところに警察車両が配置され、制服姿の警官が立っている。ものものしい雰囲気だ。立入制限区域の入口でバスに同乗した町役場職員が許可証を提示し、区域内に入る。防護服が配られる。職員曰く「今日はかなり雨が降っているので足下の防護でいいかもしれません。寿命が1時間くらい縮むだけでしょうから」。ほぼ全員、頭から足下まで完全防備したのはいうまでもない。

バスから降りる。その瞬間、目にしたのは「時間の止まっている町」だった。家もある。車も駐車場に止まっている。スズメだって電線の上にいる。けれども時間は3・11で止まっていた。私たち以外、誰も歩いていない。崩れたままの塀、道路の中央まではみ出している木の枝葉・・・本当に人が住んでいたのか？〝日常〟というものがあったのか？そんな思いを抱くほど町は静寂に包まれていた。

町役場の隣にある大きな町民ホールも〝あのとき〟のままであった。震災発生時、ここではある講習会が行われていたという。その部屋に案内してもらう。出しっぱなしの机、飲みかけのジュースのパック、カビだらけの天井。除染が最優先である原発事故被災地はここまで手が回らないのである。

政権が代わっても国は必死に復興を行っている。制限区域内でも除染が完了したところがある。富岡の南に位置する楢葉町は先日、帰還許可がおりた。

富岡町も早期の帰還開始を目指している。国はできるだけ多くの町民が故郷に戻ること、を復興の目安としている。「しかし・・・」と町職員が言う。「原発事故から4年以上経過しました。住民の置かれている環境も変化してきています。避難先で生活の基盤を築いている人もいます。帰りたいのに帰れない人、逆にもう帰りたくないのに帰らなければならない人、帰るか、帰らないかまだ悩んでいる人・・・だから許可がおりても、帰還できるから皆さん、帰ってきてくださいとは言えない。その時の住民の気持ちを尊重したい。帰還許可＝復興ではないと思います」

研修会二日目。コラッセふくしまで高崎経済大学の佐藤彰彦准教授が「原発被害からの復興の現実」と題して講演。国や福島県の復興政策と現地との意識のズレ、「復興は順調」という根拠となる数字のトリック、そして地元から沸き起こった「自分たちがやるしかない」という気概、そこにみる一筋の光・・・

当事者ではない私たちができること。それは、これからの長い時間の中で、「フクシマの現実」を理解する努力をし、復興を見守り続けることだ。

講演の終盤、佐藤准教授がある避難生活者の声を紹介してくれた。

高校生の子どもを富岡町の家に連れて行きました。傷んでしまった家を見れば帰還を諦めると思ったら、「また来るに決まってるじゃん、ここで生まれたんだし。町が地図から消えるの？」って言うんです。

女性議員がハンカチで目頭を押さえていた。後ろの席から鼻をすする音が聞こえた。私の視界も少し歪んだ。

何年先でもいい。この高校生が、いつか笑顔で自宅に帰ってくる日まで。真の復興のために、できる限りの応援を続けたい。

WE WILL SUPPORT TOMIOKA